

## HYOGOスポーツ新展開検討委員会 第1回アスリート育成分科会 発言要旨

1 日時 令和5年11月22日(水) 14:00~16:00

2 場所 県庁2号館5階 庁議室

### 3 議事録

#### (1) 意見交換

##### 【事務局】

アスリート育成に必要な支援について、意見を伺いたい。

##### 【中田委員】

新体操は日ノ本高校がインターハイで優勝するなど、ジュニアからたくさんの選手が育ってきている。しかし、海外での経験が乏しいので、今後はそういった機会を増やすことが必要。

ケガを未然に防ぐため、トレーナーとコーチが連携し組織的に選手育成をすることが必要。県が主体となってアスリートの栄養に関する勉強会などの環境を整えて欲しい。

カナダで開発されたLTAD(長期アスリート育成プログラム)を各種目で見据える必要がある。このプログラムには、セカンドキャリアのこともサポートされている。

##### 【岡崎委員】

兵庫とヨーロッパに違いという部分では、ヨーロッパの方が自己主張が強く、スポーツが身近にあり、文化となっていることが特徴。小学校、中学校段階でやりすぎないように大人がストップをかけ、コミュニケーションを取ることが必要である。そこで自己主張ができない子たちがアスリートになると取り残されてしまう。

ドイツの凄いところは、みんなが楽しめるものが「スポーツ」という共通認識がある。アスリートに特化するのではなく、「みんなのスポーツ」として捉え、どうすれば健康的になれるのかを伝えることが大切で、結果的にアスリートの成長に繋がる。

##### 【大畑委員】

兵庫県のラグビーの現状は、報徳高校が全国高等学校ラグビーフットボール大会で準優勝し、県外からも選手が集まってくるような状況で、評価が非常に高い。

兵庫県は広いため、スポーツができる環境は地域によって格差がある。特にジュニア世代ではラグビーやBMXなど、そもそも触れ合う機会がないので、子ども達がどの種目に適性があるかわからないのが現状。

小学校でラグビースクールはあるが、中学校でラグビー部が半分になる。そしてまた高校に入っていく。こういったことを避けるためにも、部活動の地域移行が重要になってくる。福井県でも合同チームが全国大会に出場できるようになったように、徐々に部活動の枠が広がっている。

現在、神戸スティーラーズがアカデミーを持っており、小学校5、6年生、中学生の部分で元プレイヤーが指導している。各チーム3、40名の応募のところ、倍くらいの応募がある。このように少しずつ認知され、プレーできる環境が増えつつある。ポテンシャルは非常に高い部分があるので、プレーできる環境をもう少し作ることができれば、プレイヤーとしての成長することと、指導する人間の活躍できる場が増えてくる。

あるスポーツ単体のイベントをするのではなく、複合的なスポーツイベントをすることによって、自分の特性を把握し、潜在的なものを見つけ出すことができる。兵庫県としてもっとポテンシャルを拡げていくことができるのではないかと。

#### 【葛城委員】

野球は道具類で金銭的な負担が多いため、選ばなくなっている。道具提供ではないが、何か手立てが必要。本来、身近で楽しくやっていた野球が、ボーイズリーグやシニアリーグに入り、進学のための野球になっている。また、身近にキャッチボールができない状況が問題である。

#### 【内野委員】

スケートボード、BMXはストリートスポーツであり、練習場所がないことが当たり前である。ただ、全国ではプレイヤーの意見を聞かずにつくられたスケートパークが多くあり、日本のトッププレイヤーが練習するようなパークがほとんど存在しないのが現状。今後、兵庫県で何か始める際は協力したい。

#### 【井上委員】

バレーボールはメディアでよく放送されるにも関わらず、人口は年々減っている。特に男子が顕著である。男性の指導者が多いにも関わらず、男子の人口が減っているのは問題。女子の方が人気はあるが、女性の指導者、コーチが少ないことも問題。

部活動は指導者の問題が1つある。海外では部活動がないため、学生の時にクラブチームで強化されて、代表チームが強くなる。日本の場合、中学生の時は素人の先生に教えてもらう。この時間がもったいない。

2つ目は、小さい頃から始めた1つの競技を続けなければならないことが問題。3つのスポーツ教室を1度にすることによって、いろんな競技に触れる機会を創出し、子どもも指導者もプラスになる。

【事務局】

部活動の果たしてきた役割と今後の展望について、ご意見を伺いたい。

【井上委員】

全く競技を知らない先生が泣く泣く指導しなくてはならないこと。そういった先生に教えてもらう子ども達も歯がゆい気持ちになることは問題。クラブチームの立ち上げについて、田舎でも話題に上がるが、進まないのが現状である。もっと県としても方針を示して欲しい。

【大畑委員】

団体で1つのことをやってきたという喜びを感じられるのが、部活動の良さではあるが、一方で競技の枠に限られることは、複数の競技をしたい選手にとっては弊害となる。

学校の先生の負担を軽減するためにも、専門的に指導ができる人が専門的な指導をする環境を作ることが子どものためでもある。

部活動のいい部分と、地域でのスポーツのいい部分をハイブリッドしていくことが大事。そういった本当にいい部分をサッカーはいち早く取り入れて成長している。岡崎さんに部活動とJリーグのクラブチームのどちらがいいのか伺いたい。

【岡崎委員】

部活動からスポーツクラブに移行するにしても、人間性の部分がポイントになってくる。自分で考えてやることが大切で、そういったことを子どもや指導者にどうアプローチするか、兵庫県がどこまでサポートできるかが重要。

【事務局】

兵庫県は広く環境も違うことから、統一にできないことはある。その中で何ができるのか、指導者の方がどう入るのか、このスーパーアスリートの方々は兵庫のリソースであるので、今日の意見を含めて合致させたい。

【事務局】

アスリートのキャリア支援について、意見を伺いたい。

【葛城委員】

プロ野球の世界で生き残れるのは一握り。毎年2月頃にセカンドキャリア研修があるが、実感がわかないのが現状である。その先にセカンドキャリアの道があれば、もっとプレーに集中できる。5割の人間がサラリーマンになりたいというデータが

ある。人手不足の企業もあるので、企業が球団に出向いて、説明会を開くようなシステムがあればいい。

【内野委員】

BMX で活躍する選手は、世界一になっても稼げるという保障もなく始めた選手ばかり。有名になれば一攫千金できるプロ選手を目指して、その後まで保障されるというのは贅沢な話。アルバイトをしながら、競技をするのが当たり前のスケートボードや BMX はセカンドキャリアは考えていない。

【大畑委員】

スケートボードや BMX はすでにデュアルキャリアをしているということ。実際アスリートはセカンドキャリアのことを考えることはできない。それよりも教育が大切で、子ども頃からいろいろなことに触れ合い、社会に活かせる教育をすべき。

【事務局】

新たなスポーツの発展として、アーバンスポーツの振興について、意見を伺いたい。

【内野委員】

現在、カルチャー系スポーツは日本が圧倒的に強い。日本が抜かれるようなことがあれば、今日話を聞いて指導者が必要になるかもしれないと感じた。アーバンスポーツは華やかな場所ではない。これから華やかになるかならないかは、皆さんの力添えが必要。

【大畑委員】

実際、競技人口は増えているのか。

【内野委員】

競技人口は増えている。昔ほど悪いイメージではなくなってきた。その理由は子どもの競技者が増えたこと。年齢層に幅が出て、他のスポーツに近くなっている。オリンピックの影響もあった。これまで業界にはなかった統一された日本代表のユニフォームも見せ方もあるが、結果的にスポーツらしく見えて良かった。

選手がお互いをたたえ合う。限界へ挑戦し技を成功させることが、やばい、凄いと感じさせる特徴が昔からアーバンにはある。

#### 【事務局】

海外のスポーツ環境の状況について、意見を伺いたい。

#### 【中田委員】

台湾ではクラブチームがない。小学校に入る前までに指導を受けられるところはあるが、小学校以降は学校での指導のみ。台湾でクラブチームを立ち上げたいが、学校単位の試合に出れない。

約 680 校は、小中高で体育を専門にしたクラスがある。午前はいろんなスポーツに触れながら学び、午後は競技として強化する。教育としてアスリートを育てるシステムがある。

デュアルキャリアは大事。自分自身で、得意・不得意を知ることが大事。トップ選手は理解していても、中堅選手は理解できていないことは台湾でも感じる。アプリとか ICT とかでサポートができれば、自分を知ることができ、デュアルキャリアにも繋がる。

特に語学が大事と思う。台湾では英語を話せる子どもが多く、アスリートにも普及している部分は学ぶべき。

#### 【岡崎委員】

ヨーロッパはスポーツと教育が切り分けられている。責任の所在がはっきりしている。日本は中途半端にクラブがお金をあげるから、デュアルキャリアを考える機会を奪っている。

子どもが高校になるまでの間に 1 回でも、海外を経験することが重要なポイント。ヨーロッパの良いところは、大陸が繋がっており、違う人種がいるため、いろんな文化に触れることができる。

#### 【大畑委員】

淡路島で県と一緒に、ラグビーと陸上、バドミントンの 3 つの競技をローテーションするイベントを行った。他種目をやることでいろんな気付きがある。

アスリートが県の職員として、月ごとに地域に出向くことが、地域の特色にも繋がる。子どもに何かを与える、経験させることで自らが考え何かを創り出す。

兵庫県の企業をスポンサーにして、官民が一緒にやればこの組織に人が集まり、膨らんでいく。子どもたちに軸を置いて、みんながメリットあることをやっていく。

#### 【葛城委員】

市・地域単位でローテーションしてイベントをやることで、まちの活性化になる。特に山間部が待ち望んでいる。

【内野委員】

家庭環境によって、参加できないこともあるので学校を巡るのもいい。

【井上委員】

兵庫県には凄い選手がたくさんいるので、いろんな競技が絡まり合って、他の県からみて兵庫県なんか楽しそうというイベントをしたい。

【中田委員】

兵庫県には7つの友好姉妹提携の国があるので、海外の国とのコラボも面白い。

【岡崎委員】

イベントをする時のゴールも重要。続かないと意味がない。それを日常にどう染みこませるのが大事。そのイベントが最終的に日常に繋がる、子ども達のすぐできる場所に繋がるような仕組みになるといいので、今後はその先を話し合いたい。